

日本海沿岸諸都市の観光振興に関する考察

小 浪 博 英（東京女学館大学）

1. 環日本海地域の観光

日本海の面積は約130万平方キロメートルであるので、これを長方形にすると、短辺が1000キロメートル、長辺が1300キロメートルということになる。これは相当に広いということである。その日本海に面して日本の弧状列島が横たわり、その海岸沿いの延長は稚内市から五島市まで、直線で約2000キロメートル、60市（合併により数字は変わる）が存在する。単純に距離を市の数で割れば、約33キロメートルとなる。これは東海道53次と比べると約3倍の間隔が空いていることになる。換言すれば、これらの都市は東海道のような横の線のつながりではなく、多分海路利用した点的つながりであったのであろう。

本論では60都市のうちから、近接しているものを除外して、図1に示す41市を対象に主としてホームページによって分析を試みた。（図1 省略）

2. 対象都市の概要

これら対象都市について、それぞれの市役所公式ホームページおよび観光協会のホームページから調べてみると表1となる。（表1 省略）

3. 対象都市の人口規模によるグループ分け

人口が100万人を超えている札幌市、北九州市、福岡市はいずれも都市自体が観光の対象である。札幌市は言うまでもなく北海道の都であり、夏季の冷涼な気候と冬季の雪が観光の目的になるほか、紅葉、温泉、飲食、近隣の小樽など多くの観光客を通年的に引きつけている。北九州市は旧小

倉市を中心に多くの伝統行事があり、また、歴史的文学碑など観光資源も豊富である。更に、現在工事中の北九州空港が完成すると、都心から30分で空港に行けるようになり、しかも海上空港であるので離着陸時間帯の弾力化が期待できる。ただ、近くに福岡市があり、競合分野は福岡に取られる危険性があるので、その差別化をいかに図るかが課題となる。福岡市は福岡空港、釜山へのフェリー、新幹線と交通の便に恵まれており、天神などの都市機能も充実している。また、博多どんたくなどの伝統行事も多く、多数の観光客が訪れている。

以上の通り、100万都市は交通施設が整備されており、観光資源の蓄積も多く、ショッピングセンター、ホテル等の都市機能も充実しているので、適切な旅行商品の開発と宣伝さえ間違わなければ問題はない。しかし、オリンピック開催の札幌市と、アジアからの航空路が集中する福岡市は知名度の点で何の問題もないが、北九州市はそうではないので、これを除いた2都市を第1グループとする。

人口規模が概ね25万人程度以上の都市は、函館市、青森市、秋田市、新潟市、富山市、金沢市、福井市、下関市、佐世保市である。函館、下関市、佐世保市以外は県庁所在都市である。これらの都市はいずれも天然の良港か堀込み港湾を持ち、歴史に恵まれている。しかし、札幌や福岡と異なり、チャンスがあればいつでも行ってみたいとなるということではないと考えられる。それは北九州市についても言えないだろうか。ここでその事実を証明することはできないが、北九州を含むこれらの

都市は、もし行くとしてもその理由を考えてから出かけることとなるのである。北九州市は合併都市であり、小倉だと思えば、小倉北区と小倉南区の合計人口が約50万人であるので新潟並みである。このように考えると北九州市は札幌市や福岡市とは違うと考えるべきであろう。次に、これらの都市へ行こうとするとき、人は何を考えるであろうか。もちろん都市毎に異なることは当然である。つまり、人口が25万人から50万人くらいの都市は、都市であることに加えて、何らかの目的を明確にすることが必要となってくる。表1から読み取ってみると、歴史を売るものが函館市と金沢市、交通と飲食で売るのが新潟市、下関市、北九州市、それ以外が青森市、秋田市、富山市、福井市、佐世保市である。これらの都市にもそれぞれお祭り、温泉、テーマパークなどがあるが、通年的に観光客を集めようとするより更に何らかの工夫をしなければならないであろう。これが第2グループの宿命である。以上により、北九州市を含むこれら諸都市を第2グループとする。

その次のグループは人口7～8万人程度から25万人程度までの都市である。これらは、小樽市、酒田市、鶴岡市、上越市、高岡市、小松市、舞鶴市、鳥取市、米子市、松江市、出雲市、唐津市である。これらは母都市依存型の小樽市、小松市、唐津市が浮かび上がる。もちろん、小樽には小樽の歴史が、小松には空港が、唐津にはおくんちや虹ノ松原があるが、基本的には札幌、金沢、博多にそれぞれ依存している。次に、富山市をこのグループにいれてみると、双子タイプになっている都市が、酒田・鶴岡、上越（直江津・高田）、富山・高岡、米子・松江が浮かび上がり、孤立型が舞鶴、鳥取、出雲、唐津である。母都市依存型や双子タイプはそれなりに強い競争力を持つが、孤立型は出雲をのぞいて、魅力を増進する必要があるであろう。富山を含むこれらを第3グループとする。

以上の他に稚内市、留萌市、佐渡市、輪島市、

七尾市、敦賀市、豊岡市、境港市、安来市、浜田市、益田市、萩市、平戸市、対馬市、壱岐市、五島市がある。このうち境港市と安来市は米子・松江都市圏と考えられるので他の都市とは区別する。つまり第3グループに入れることにする。残った都市が第4グループとなる。第4グループは相当な個性を必要とされそうである。

4. グループ別観光振興方策の考察

インターネット上で41都市の検索を行った結果、次のようなことが判明した。

- ・すべての都市が索引に「観光」またはそれに類似した項目を設けている。
- ・全ての都市が宿泊、食事の案内をのせているが、歴史的背景を分かりやすく紹介しているところは半数程度しかない。年表にしている都市もあるが、これでは分かりにくい。
- ・外国語での案内をみると、英語の案内があるのは41市のうち24市、朝鮮語9市、中国語11市、ロシア語4市、その他少数の都市でドイツ語、フランス語、ポルトガル語があり、益田市はこれらに加えてスペイン語、ベトナム語、インドネシア語、フィリピン語、タイ語の頁を設けている。つまり、半数近い都市でのホームページは未だ海外に目が向いていないこととなる。観光の項目の中に突然英語の頁を作っている都市もあるが、これでは意味がない。
- ・動画を導入している都市が見受けられ、安来市のようにそれなりの効果を発揮している例もあるが、多くは図の引用がしにくくなるだけであり、宣伝効果を減少させている。

次に、グループ別の観光振興方策について考察する。

（1）第1グループ

札幌市と福岡市は我が国を代表する北と西の都であり、北海道、九州においてもそれぞれ強力な中枢都市となっている。従って、この両都市の使命は単に自都市の発展を考えるのではなく、圏域

全体の牽引車となると共に、国を代表する性格を有することである。従って、札幌市または福岡市へ来た外国人観光客には広く日本を見てもらうことが重要であり、周辺観光地と回遊コースを組む、全国的な情報にリンクさせる、などを検討しなければならない。それが結果として両都市の入込み客を増加させることになる。

（２）第２グループ

北九州市を含む第２グループは第１グループほどの中枢性はない。北九州市といえどもその知名度はオリンピックを開催した札幌やアジアからの直行便が来る福岡よりは相当低い。つまり、第１グループが黙っていても海外からの集客が期待できるのに対して、第２グループは基本的にはドメスティックである。従って、国内的には独自性を発揮すればよいし、国際的には第１グループや東京、大阪と回遊コースを組む必要がある。いずれも地域の中核都市であるので、地域の先導的役割も求められる。

（３）第３グループ

人口規模が25万人程度より少ないこれらの都市は、その地域にあっては中心都市ではあるが、当然のことながら全国的知名度は都市によって異なる。例えば、小樽市と出雲市は比較的良好に知られており、日本人であれば、真偽のほどはとにかくとして、何となくイメージをもっており、機会さえあればいつでも行ってみようと思っているが、同じくらい知名度のある富山市、舞鶴市、松江市は、町のイメージが明確でなく、訪ねる前に一瞬とまどいを生じることになる。酒田市、鶴岡市、上越市、高岡市、小松市、鳥取市、米子市、唐津市になると、必ずしも知名度が高くはなく、誰かに言われれば行ってみようかということであろう。それだけに、まずは国内向きのメニュー開発が必要とされるであろう。富山市は人口規模が大きく第２グループにも属するので、地域の先導的役割を担う。

（４）第４グループ

このグループの都市は人口規模こそ小さいが特徴を持っている都市がある。例えば最北端の稚内市、金山のあった佐渡市、明治維新で名をはせた萩市、韓国をのぞむ対馬市、鎖国以前の貿易窓口であった平戸市などである。これらの町はそれぞれの歴史を活かして宣伝することが必要であろうし、それ以外の都市である、留萌市、輪島市、七尾市、敦賀市、豊岡市、浜田市、益田市、壱岐市、五島市も温泉、海洋、歴史などを最大限活かして集客をする必要がある。これらの町にとって特に大切なことは、一度来たお客をもう一度来させることであろうと思われる。

５．結 論

日本海沿岸諸都市の分析をしてきたが、表１から、日本海沿岸であるからこそできることは次の通りであると考えられる。

- ・ロシア、中国、朝鮮半島への渡航接点。ただし、成田や関空にどれだけ対抗できるかは不明。
- ・日本海に沈む夕日の景観。
- ・日本海からの海産物。
- ・北回り船時代に築かれた歴史的文化と料理。
- ・渤海国、高句麗等との交流の歴史。
- ・冬季の雪と日本海が織りなす自然の非日常性。
- ・日本海そのものの活用。

問題はこれらの特徴がホームページに必ずしも十分表現されておらず、東京の感覚でホームページが作られているような印象を受けた。今後においては、外国語表記を増やすことはもちろん、太平洋側諸都市のホームページや観光政策を十分分析し、日本海沿岸らしいものを作り出すとともに、第１、第２グループのすべて、および第３、第４グループの都市の過半は環日本海地域を意識して、国際交流を念頭に置くことが必要であると考えられる。

COMMENT

戸 沼 幸 市（早稲田大学）

昨今、日本の地域づくり、都市づくりにおいて観光は中心的な話題になりつつあり、本研究は時宜を得たテーマである。特に、日本海沿岸地域において、戦後の工業開発の挫折、80、90年代に入ってから対岸貿易指向の停滞が背景にあらう。

本研究は沿岸41都市の主な観光資源をホームページから情報を得て、広報の仕方の未熟（外国向けのPR不足など）を指摘しつつ、多面的に分析しているが、逆に各都市とも徐々にこの方面に力を入れてきているという印象を受けた。対象都市を人口規模別にグループ化して特徴を適切に論じているが、札幌を沿岸都市として取り上げるのは地理的に言ってやや疑問である。あえてこれを論ずるのであれば、北海道一極集中の札幌としての視点があるのではないか。この延長線上には観光都市東京の問題があらう。

誰が観光をするのかの視点ももう少し明確にし

てほしいところである。日本人にとって、外国人にとって、対岸諸国の人々にとっての魅力といった視点からの知見を聞きたいところである。次なる研究の展開に期待したい。

コメンテーター自身、日本海沿岸のまちや都市を多く見聞してきたが、偶然の人や事物との出会いや、隠れた資源を発見して楽しんだ。謎への問い掛けを含んだ観光広報のあり方についての課題にも挑戦してほしい。

2004年10月2日、環日本海学会10回記念学術研究大会が、「大交流時代と北東アジアの新思考」を掲げて東京で開催された。この日は奇しくもイチローがシアトルでアメリカ野球大リーグ史上初の258本目のヒットを打ち、混住社会アメリカで大喝采を浴びていた。テーマを読み替えて「大交流時代の結節点と新生活様式」の見本でもあらうか。

中国東北三省の国際観光市場に関する考察

梁 春 香（東洋大学）
宇佐美 信 幸（東洋大学大学院生）

北東アジア地域をなす中国の東北部にある遼寧省、吉林省、黒龍江省のことは、通常東北三省といわれる（以下東北三省という）。東北三省の人口は1億385万人（2001年末の統計による）で、中国全人口の8.6%を占めており、面積は1,971,900平方メートルである。

周知のように、20世紀末期から中国経済が高度成長期に入り、とくに観光は国の基幹産業として

育てられてきた。2002年の観光統計によると、中国への来訪到着者数、国際観光収入ともに世界観光ランキングで第5位となり、受け入れ観光者数は世界観光全体の5.1%に占めるようになっている。そこで北東アジア地域の主要地域としての中国東北三省の観光市場の現状を把握して、北東アジア観光交流拡大への可能性を明らかにしようとするものである。